

9/10 泉石



吉良智子

七月二十六日に行われた「戦争立法反対ママの渋谷ジャンク」に娘を通して参加した。「だれの子ともさせない」を合言葉に、ベビーカーを押したママたちが大勢参加したこのデモは、子どもを安全を最優先に、水分補給やミスト、うちわの用意がされ、あたたかい気配りに満ちていた。子どもを熱中症の危険にさらしているという一部の心無い中傷はまったくの的外れだ。

参加しながら、歴史に思いをはせた。かつての戦争において、女性や母親たちは子どもを「すすんで」戦場に送り出していたからである。国防婦人会などの戦時活動は、ある意味で「女性解放」でもあった。それまで「家」に縛られていた女性たちが「兵隊さん」のためなら外に出て社会活動に参画してきた。そして「兵隊さん」となると

### ママデモで思う



猛暑の中で安保関連法案に反対しデモ行進する親子連れら＝7月、東京都渋谷区で

当時の女性リーダーたちは、戦時の「女性の活用」政策に取り込まれていった。それを「応援する」ように、美術、文学、音楽、メディアなどがこぞって、「母性」をたたえる作品や活動を制作・推進した。特に女性の創作者は、女性が女性に訴えるという立場で、積極的に参与していった。そのような動きのひとつに女性美術家の団体「女流美術家奉公隊」があり、母であることや労働することの「すばらしさ」を呼びかけた。戦争末期、兵力の不足から少年兵のリクルートが為政者によって推進されたとき、彼女たちは少年兵を「ママに

に立派な息子を育て戦場へ送り出さない」というメッセージを送ったのである。こうした展示会がどの程度の効果をもたらしたのかはわからない。だが「政策や法は国民を物理的に動かすが、内面からは動かさない。内面から国民を動かすには「文化」を動員しなければならぬ」と「若菜みどり」戦争がひくく女性像(一)。こうして女性あるいは母に向けて戦時下のあるべき女性像が表象され、喧伝されていった。

今日、「あの戦争」と同じ空気が漂うのを感じている人は多い。女性に関する政策をみても、少子化対策としての「女性手帳」や「妊娠・出産の奨励」、労働人口の減少に対する「女性の活用」など、枚挙に暇がない。そして「生後三年は母親が子を世話すべきだ」という子育て論を背景とした「三年間抱っこし放題」という政府方針を出すなど、現政権は「母性信仰」との親和性が高いのだ。「政策芸術」なるものをうたう「文化芸術懇話会」で、出席者がメディアを威圧する発言をした顛末は記憶に新しいが、「文化」の動員をねらったことは明らかである。当時と現政権のシエンター観は同じなのだ。「母性」は誰も異論を差し挟めないほどに「美しい」。権力がそれを利用しようとするときママはもろろん、すべての人々は注意してほしい。(きら・ともこ)シエンター 史研究者。近著に「女性画家たちの戦争」(

## 権力の「母性」利用 警戒を

戦場に行った男性たちを代わって職場に進出し、働いた。一方で「つめよむせよせよ」の「母の日」や「母子手帳」は、「母性」の称揚や管理の「妊娠・出産」は、「兵士補」のために導入されたものだ。近代における戦争とは総力戦であり、女性の協力がなくては戦争継続は困難だったのである。そのため、為政者は「母性」を称揚し、あらゆる手段を用いて

全国主要都市で展示会を開催した。回展では兵学校で訓練を行つた少年たちの姿を描写した作品が展示された。ただしこれは兵士となるべき少年ではなく、息子を持つ母に向かつて呼びかけることを主眼としていた。つまり「展示会を見ているあなたも、このよう